

四月二十五日 日曜日

銅版画五点製作終了する。一日二、三時間刻んで五日程かかった。こんな事をするのは一生に一度の事かも知れぬから、良い体験であった。描きたいモノを描いた。やっぱり建築的風景になつてしまつのは、もうやむを得ないか。廃墟の黙示録のような主題を描き続けた。ミャンマのパガンの遺跡の記憶が強くよみがえってきた。ユーラシア大陸、他で数多く眺めてきた遺跡の印象がこれ程強かつたのかと、自分でも驚いた。ペルセポリスで見た竜巻きの記憶が突然、出現してきたのにも驚いた。他人様にお見せ出来る位のスケッチもほんの数点描けた様に思うので、秋の展覧会は何とかなるだろう。宮崎の現代つ子ミュージアムにも一週間くらい閉じ込めて製作したら面白いだろうなと考えた。松崎町の蔵も製作場所には良いな。これからは無駄な事は極力省いて、ワガママを押し通す。ベーシーの菅原の忠告が今頃になって、リアルに身体にしみてきている。「無駄な力はもう使わない方が良い。」確かに余計な事が多過ぎたな。今日現在と同じように、やりたい事だけを夢中にやるのが合理的なのだ。

綿貫氏から渡された銅板は残り一枚である。何を描くか。別の感じに取り組んでみようか、あるいは遺跡シリーズを続けようか。

四月二十六日

銅板を彫るのが良いと思えるのは、描くべき主題を定めて次に

しかるべきある形態を決めて下図をイメージした後は、ほぼ自動的に作業が進められる事だ。コツコツと銅をひつかいていけば良い。その手の感触と、適度な筋肉の疲れが、何かやっつてるぞという自己満足をもたらせる。コツコツひつかいていけば、何となくさまになってくる気配も濃厚になってくるから始末に終えない。図面にゴリゴリ、テクスチャーを描き込んだり、影を描き込んでゆく、まがいの充実感と酷似している。

しかし、これは何を描こうとするのかという問題とは程遠い作業であるのは確かで、マア、例えてみれば傷口にできた、かゆいかさぶたをボリボリひつかいているのと変わりはない。しかし、人間も動物の一種であるからね。それをあんまり否定してもしょうがないか。